

アメリカの中の日本人

今回の研修では、日本企業の駐在員でいずれは日本に帰国する日本人の方、アメリカ人との結婚でアメリカに永住する日本人の方、日系人の方という3つのケースの在米日本人からお話を伺う機会を得た。

1 シカゴ在住日本人駐在員

シカゴに派遣され5年になる。支社唯一の日本人ということから、本社と現地社員との間で板挟みになることもあり、日本とアメリカの企業文化のギャップに日々葛藤することがあるという。生活上ではアメリカで特に不便を感じることはないが、日用品で日本製品の品質の良さを再認識することが多いという。

また、現在子供は現地校に通学しているが、いずれ帰国することを考えると、いかに子どもの日本語能力を高め、帰国後に日本の学校教育にどのようにスムーズに適応させるかが目下の悩みである。そのため、子どもを土曜日に日本語補習校に通わせている。

2 セントポール在住日本人

ホームステイ先の奥様が日本の方であり、アメリカ生活が13年になる。アメリカ人のご主人とは日本で知り合い結婚され、10年間日本で暮らした後、渡米された。最初に住んだフロリダでは、さまざまなカルチャーショックで、苦勞されたという。近所で日本と同じ系列のコンビニを発見し、お握りを買おうと喜んで店に入ったら、どこにもお握りは見つからず、親子で落胆して帰ってきたということもあったという。アメリカの生活に慣れることに必死で、日本人ということで差別されていると感じたことはなかったという。その後移り住んだミネソタ州でも、職場やコミュニティーで同様に差別を感じることはなかったという。しかし、ヨーロッパ系人口の多いミネソタ州では、アジア系の日本人は目立つ存在である。一人息子はアジア系の顔立ちということもあり、ミネソタではアジア系として、日本ではアメリカ人として見られ、居心地の悪さを感じていたという。彼が大学の短期研修でハワイを訪れたとき、アジア系の人口が多いこともあり居心地の良さを感じたという。やはり、目に見えない壁があるのかと私は感じた。また、その家庭の子どもに対するしつけは現在の日本の親と比較して厳しいと感じた。

3 ロサンゼルス在住日系人

ロサンゼルスのリトル東京にある全米日系人博物館を見学した。この博物館には一世から現在にわたる日系人の歴史が刻まれている。特に、太平洋戦争では一世二世の日系人は敵性外国人として収容所に入れられた苦難の時代を経験した。博物館には当時の収容所の一部が移築展示されているほか、一世や二世の人たちの苦勞がしのばれる展示品が並ぶ。二世の方に内部を案内していただきながら、当時の話をお聞きすることができた。日系二世の人たちが模範的なアメリカ人になろうとして必死に努力されこと学校の歴史の授業では日系人が強制収容された事実は教えられなかったが、ヒッピー出身の教員によってこの事実が取り上げてられたことなど様々な話を興味深くお聞きすることができた。話の端々から、「日本人」という意識が日本に住むわれわれ日本人より強いことが感じられた。

(浅井真樹)



全米日系人博物館